

これからも下水道

越智 茂

OCHI Shigeru

管清工業(株)
本誌編集委員



私が管清工業に入社したのは1985年（昭和60年）4月でした。それまで、下水道の事など全く興味もなく、小学校4年生の社会科で勉強したということさえ、就職をするまで忘れていました。しいて言えば、雨が降る日にマンホールの蓋の上を歩いた時に滑った記憶があるくらいでした。では何故、私が管清工業に入社ができたのか？というと大学で所属をしていたインドネシアゼミ教授の奥源蔵先生からの紹介があったからでした。

バブル直前の80年代、お金のない私は、レストラン、居酒屋、ビアガーデン、年末の魚市場、土木作業員、造園業等アルバイトに明け暮れていました。

4年になっても就職活動をしていない私を見かねて、奥先生から紹介を受けたのが、管清工業でした。

後から聞いた話ですが、ゼミの1年先輩で先に入社をしていた小川尚氏（現・(株)カンツール代表取締役社長）が人柄も穏やかで優秀であったため、引き続き同ゼミより学生を紹介してほしいと言われたそうです。何の疑いもなく、奥先生が言われるがまま当時社長の故・長谷川清氏とお会いしました。当時

の社長から下水道の維持管理がこれからは重要になると熱く語られていたことが強く印象に残っています。国の施策やこれから必要になる技術など、何もわからない私は唯々うなずくだけでした。そんな人柄も成績も小川先輩とは雲泥の差がある私を拾って頂いたことに今でも感謝しています。

採用が決まった夜、父にその話をしたところ、「その仕事は絶対に無くならない。これから先、社会貢献の高い良い会社だ」と言われたことを今でも覚えています。

入社後は東京支店工事課に配属になり下水道の調査、清掃、補修の現場作業に携わりました。

昭和60年当時の工事課の先輩方は元気な方が多く、後輩に対しても熱い思いの叱咤激励が日常茶飯事でした。今ならば速攻でブラ〇〇企業、パワ〇〇上司で叩かれていたでしょう。

当時は同業他社も現在ほど多くないため、地方への出張も多くありました。出張先では怖い先輩とも地元の美味しいつまみで酒を酌み交わしながら現場の反省会をしたことが懐かしいです。

調査はTVカメラ調査、潜行目視調査、人孔調査、スモーク調査、流量調査、音響調査などが主流でした。清掃は高圧洗浄車と強力吸引車、給水車の3点セットで行う高圧洗浄が主流でした。その中で伏せ越し管という施設の清掃作業があります。伏せ越し管とは河川や鉄道等を避けるために地下深くサイフォンのような構造で排水をする施設です。この清掃は当該管きよの下水を水中ポンプで切りまわし安全を確保してから、胸まである胴長靴を履いた作業員が管内に入り吸引ホースで堆積している土砂を吸い上げるという肉体作業です。サイフォンのような構造



入社直後の大口径管調査現場でマンホールへの入孔前（1985年頃）



横浜駅周辺の接続管調査をしていた時に小学生からファンだったアグネス・チャンさんと遭遇。快く撮影も受けてくれました（1989年頃）



ホースライニング工法の施工現場で撮影（ホースの上、ヘルメット姿が私です）
（1992年頃）

なので堆積した汚泥や油分がかなり硬くなります。十数年も清掃をしたことの無い管きょの作業をした後は、身体に染付いた臭いが数日間取れないなんてこともありました。

補修はパッカー注入止水、Vカット止水等の浸入水防止工事が主流でしたが、将来的に増加する管の老朽化に対応する補修工法として管更生工事が普及し始めた頃でもありました。

弊社は芦森工業(株)が開発をしたホースライニング工法協会に入会させていただき、多くの実績を残すことが出来ました。私も工事課時代の8年間で多くの現場を経験させていただきました。

そんな入社2年目の年度末、横浜市での管更生工事（ホースライニング工法）現場での出来事です。マンホール内で硬化した更生管の切断作業を終えて、切粉まみれになって道路上に疲れ切って座っていた私の傍を、子供の手を引いたお母さんが通り過ぎて行きました。その時お母さんが言い放った一言が今も耳に残っています。「○○ちゃん、言う事聞かないと、あんな風になっちゃうわよ！」確かに私を見ていました。

当時は、毎日朝早くから夜遅くまで働いて、下水まみれ、糞まみれになって、自分の時間も無い生活から逃げたいと思い、会社を辞めたくてしょうがないと言う心理状態の時期でした。

その後も悶々とした日々が続き、自分の中でも解決が出来ませんでした。

そして、当時の上司である工事課長の長谷川健司氏（現・管清工業(株) 代表取締役社長）に打ち明け、

会社を辞めたいと伝えました。社長からはひと言「何も言わず3年間は頑張れ」だけでした。最近になってその時の社長のお気持ちを聞く機会がありました。「我々のような下水道の管理をしている作業員を低く見下すのが世間

である。私たちが管理をしているから市民生活が守られている。そういった偏見を受けない下水道管路管理業界にしなければいけないと思った。」と仰っていました。

いわゆる「仕事辞めたい病」を仲間に支えられながらなんとか乗り越えることができ、結婚、妻の出産、職場での責任も感じながら徐々に仕事にやりがいを見出すようになりました。

その後も紆余曲折あり、悩みや問題も数多くありましたが、その都度周囲の方たちに助けられながら現業部門8年、営業部門21年、技術開発部門1年、総務・管理部門3年を経て、現在の本社管理本部広報課で勤続34年目を迎えました。

現在は5人の子供たちも成長、独立し長女には6歳(男子)と2歳(女子)の子供がおります。「ジージ！バーバ！」と呼ばれては、くしゃくしゃ顔になってしまいます。長男は結婚の気配は全くなし、次女はもう少し2人の生活を楽しみたいと話し、新入社員1年目の三女はコスパの良い？海外旅行が楽しみで、高校2年の四女は今は青春真っ盛りという感じです。

この子供や孫たちまた、その子供たちが快適に安心して生活できる環境に下水道が寄与していることは間違えないといえます。人々が生活するうえで欠かすことのできない下水道を守り続け次世代の人々に繋げていく、この仕事は絶対に無くならない。下水道に全く興味のなかった私が人生の大半を費やすとは想像もしていませんでしたが、知れば知るほど奥が深い下水道、この仕事に誇りをもって子や孫へ伝えていきたいと思います。